

# うたごえ新聞



5月18日、光州での5・18光州民衆抗争20周年・国際音楽祭「Human voice」。日本のうたごえのステージ

## 2000年5・18光州民衆抗争20周年

日本のうたごえ代表团(106人)、演奏・交流



ソウルと光州の芸術祭での、うたごえの演奏は、現地に身を置く緊張感が創造を深め、会場からも大きな拍手を受けた。同時に、旅程の中であらためて触れることになった「日帝支配」(1910年から45年までの植民地支配)

【光州から世界へ】①  
5月16日、成田、関西、福

光州ではこれまで光州事件の犠牲者を追悼し、光州の精神(民主化運動の歴史)を伝えていく「光州民衆芸術祭」が開かれてきた。日本のうたごえ運動は、一昨年のうたごえ運動創立50周年記念祭典(東京国際フォーラム)を機に韓民族音楽人協会との交流を始め、昨年(1999年)に光州芸術祭参加。今年は5月16、19日の日程で、北は山形から、南は福岡までツアーを含め106人の大代表团での訪韓となった。



▲光州事件の犠牲者が眠る光州・望月洞墓域で「彼らのための行進曲」を献奏

の歴史、韓民主化運動の歴史から、日本での歌を通しての民主主義、平和の活動へ、あらたな決意をする旅となった。

岡の三空港から韓国入りしたメンバーはソウルの金浦空港で合流、三台のバスに分乗してソウル市内のホテルに着く。結団式の後、すぐハル

80人余希望参加のメンバー、男女のパートバランスもよい。民主化運動の犠牲者追悼と光州事件を学ぶ、という趣旨から、その声は最初から気迫を感じさせる。  
今回のレポートは、韓国の歌「故郷の春」「朝露」「彼らのための行進曲」(以上ハングルで、「やけつく」)、「日本の歌は」「わたぼうしの中に咲いた花」「君は生きてるか」「未来をかける」。

**今週の記事**

- ☆光州から世界へ／2000年平和行進 **4・5面**
- ☆ず〜むあっぷ 東大阪「文化のつどい」／森首相発言に抗議 **3面**
- ☆【連載】「ミュージック・トゥデイ(日下部吉彦)」「われらニヤの合唱ニヤン(古沢望)」「イキイキ和太鼓/からだど心が笑っちゃう/「空を見ますか」(池辺晋一郎)
- ☆楽譜紹介「母さんのコスモス」 **7面**
- ☆2000年平和行進in静岡 **8面**

# 人権と平和、和合、光州から世界へ

5月16日、19日、韓国・光州民衆抗争20周年の記念音楽祭参加、演奏交流に、日本のうたごえ代表团(106人)が訪韓した。光州のメッセージを世界へ、訪韓レポート。今号より掲載。  
随存取材 三輪記者

1980年5月、日本の隣国韓国で、全土に沸き起こった民主化の行動に銃弾が及び、犠牲者を出した。この時、事実上権力を掌握した全斗煥(チョン・ドファン)ら戒厳軍は、2000人は疑問だ。

前年の1979年、強権政権朴大統領暗殺、つづく粛軍クーデター後、つかの間に訪れた「ソウルの春」は軍靴で踏みじられた。

各地でコンサートが計画されているが、「チェルノブイリのコウノトリ」「悲しみの鶴」など、原発事故で何が起きたか、とスライドの上映と共に訴え、バンドゥーラを弾きながら「希望の灯を消さないで」「心が悲しみをくぐり抜けて行きますように、あたたい心が人々を一つに結びつけますように(略)私たちが守って行こう、私たちの唯一の故郷ウクライナを、輝かしい祖国を」と歌う姿は深い感動を呼んだ。

チェルノブイリの原発事故から十四年たった。事故当時わずか六歳だったナターシャ・グジーさん(ソブラノ)が「チェルノブイリ子ども基金」の招請で現在日本を訪れ、現地の子ども達が今なお苦しみ、当時事故処理にあたった人達の死亡が続いている事を、美しい歌声とバンドゥーラ(琵琶に似た大きな弦楽器)の演奏で訴えている。  
☆ ☆ ☆  
また、彼女は現在日本語を勉強し、日本語で「歌うこと」によって多くの生命が救える。……だから歌いたい、誰かを助けるために生きていきたい」と挨拶し、一番好きなたととして「故郷」を日本語で歌った。私達も志を持ち活動しているが毎日の生活に追われつつ自分に甘くなる現状を深く考えさせられる一瞬だった。ナターシャ・グジーさんの演奏はしずおか祭典(11月26日)で実現される事になった。(T)